特集 没後50年記念 イーゴリ・ストラヴィンスキー〜生涯・芸術・時代・影響

ストラヴィンスキーの生涯、芸術、影響

転機は、師匠となるリムスキー＝コルサコフとの出会い

●伊藤美由紀

1971年にニューヨークで亡くなったストラヴィンスキーは、20世紀最大の作曲家の1人で後世に多大な影響力を与えた巨匠である。89歳の長い生涯、その時代に生まれた多様なスタイルの影響を受けて自分の作品の中に積極的に取り入れて異なった作風の100曲を超える作品を残しており、後にメシアンに「カメレオンのような作曲家である」と例えられている。それは彼の類稀なる探究心と革新性から生まれた賜物であろう。没後50周年となる今年、改めて波瀾に満ち急速な変化を遂げた時代を生きた彼の生涯、業績を振り返ってみる。

父はサンクトペテルブルクの帝立歌劇場の第一バス歌手として活躍し、子供の頃から音楽に囲まれた環境であった。9歳にピアノを習い始め、即興演奏、父の蔵書のオペラのスコアを初見演奏するのを楽しんでいた。ピアノは彼にとって生涯を通して大きな意味を持ち、ピアノで作曲し、「音素材とじかに接触して作曲する方が、その素材を想像しつつ作曲するよりずっと好ましい。」と述べている。子供の頃から束縛を好まず、友達も作らず孤独であったが、劇場にはよく通い、グリンカ、チャイコフスキー、リムスキー＝コルサコフ、グラズノフの作品を愛好し、習作の中でそれらの作品を模倣しようと努力したと回想する。母に連れられて見に行った劇場でチャイコフスキーを見かけたこと、《悲愴》を聴いた事は、印象深く記憶に残り、作曲家を志すきっかけにもなったそうだ。

両親は生活の保証のない音楽の道に進ませることに反対し、サンクトペテルブルク大学で法律を勉強することとなる。音大に行かないことと引き換えに両親に頼み込み和声の先生に師事する。既存の方法の助けを借りることなく自力でアイデアを実現し問題を解決することを好む性格で、和声のレッスンも期待に反し、結局、自身で取り組んだ対位法に魅了され、作曲を始める上で役に立ったと回顧する。

転機は、師匠となるリムスキー＝コルサコフとの出会いであろう。通っていた大学で彼の息子と友人となり、父であるリムスキー＝コルサコフに作曲家になりたいという願望を相談したことが発端となる。3年間の定期的なレッスンでは、リムスキー＝コルサコフのピアノ譜やベートーヴェンのソナタ、シューベルトの弦楽四重奏などの古典派の楽曲を管弦楽化する課題を中心に、管弦楽法、形式を学んだ。彼の住んでいた首都サンクトペテルブルクは、新しいものを常に取り入れる発展期で、政治のみならず芸術も活発であった。後ほど彼に多大な影響を与えたディアギレフにより刊行された前衛的な雑誌『芸術世界』や、音楽院のアカデミックな考え方に反抗し新しい芸術傾向を発信し、フランク、フォーレ、ドビュッシーらのフランス音楽の作品もプログラムで取り上げる活動を始めていた『同時代音楽の夕べ』という音楽団体から、最新の芸術情報を得ていた。当時、自由で斬新であったドビュッシーの作

風には特に大きな影響を受けたと語る。

このような時代の中、作曲家としての名声を獲得しデビューに導いたのは、パリのオペラ座におけるバレエ・リュスの公演の為にディアギレフから委嘱された《火の鳥》である。その後、ロシアを去ることにもなった。ディアギレフは、デビューから彼を積極的にサポートし、彼の音楽の理解者でもあり作品の普及に協力的であった。当時、バレエ音楽のロシアでの評価は、オペラに比べて劣ったジャンルで、真面目な作曲家の仕事には相応しくないと見なされていた。聴衆もバレエの音楽は二次的な伴奏としか考えていなかった。そんな中、チャイコフスキーの《白鳥の湖》、《眠れる森の美女》は、作曲家の存命中には聴衆たちには好まれなかったものの、音楽家たちには強烈な印象を与え、新進バレエ振付師、才能に溢れたダンサーが次々と登場しバレエ界に大きな変化を与えた。更にバレエ界に活気を起こしたのがディアギレフである。ストラヴィンスキー自身、古典バレエはその構成の美しさ、形式の貴族的厳格さが自分の芸術観に一致すると述べており、後年、ディアギレフの提案によるチャイコフスキーの《眠れる森の美女》を蘇らせる計画にも関わっている。バレエに子供の頃から親しんでいたストラヴィンスキーにとってバレエには特別な思い入れがあり、75歳の作品《アゴン》に至るまで生涯にわたりバレエ音楽の創作に関わり、バレエ界の発展に貢献した。

ロシアの伝説に基づいた《火の鳥》、ロシアの人形劇に基づき、人形の動きを模倣した舞踏を取り入れた《ペトリューシュカ》、そして今までの試みの集大成である《春の祭典》の3大バレエは、ロシア民謡の様々な旋律を多彩に展開しており、民族主義、原始主義と呼ばれる時期の傑作である。子供時代の音響的な思い出として自伝の中で、「家族で夏を過ごした田舎で出会った唖の老人の農夫が、大音響を立てて舌打ちして子供たちを怖がらせて、そして2つのシラブルからなる歌に右手で音を出してリズムを作る動作に見入って自分も真似ていた。また、隣村の女たちのユニゾンで歌う歌を真似して歌ったりしていた。」と回想している。子供の頃から記憶に残るほど民族的な音響、特殊なリズムの虜になり、その音楽的感覚は彼の強烈な個性、故郷への想いとして作品の中に反映している。ロシア民謡の旋律は、神秘的で独創的な彼の音楽世界へと昇華されていく。

パリでは、ドビュッシー、ラヴェル、サティ、ピカソ、コクトーらの芸術家との交流により、様々な影響を受ける。《火の鳥》初演後に賛辞を贈る為、舞台の上まで来てくれて以来、ドビュッシーとの交友関係は続き、彼の評価の繊細さや理解してくれたことに感謝していた。《春の祭典》の作曲中に書かれドビュッシーに献呈した合唱と管弦楽の為のカンタータ《星の王》では、象徴主義的

バレエ、ダンスの専門紙にリニューアル

週刊オン★ステージ新聞

購読料　1年分　¥7300

メールまたは電話で左記へお申込みください。

〒150-0002
東京都渋谷区3-7-6　第6矢木ビル4F
(株)青林堂　週刊オン・ステージ新聞編集部
TEL03（5468）7769　FAX03（5468）7369
Eメール　onstage@garo.co.jp

音楽の世界

2021年 新春号　定価800円

謹賀新年
特集　深沢亮子・北川暁子
《希望はどこから生まれるか～今芸術にできること》
深沢亮子・高橋通・高橋雅光
小西徹郎・中島洋一
特別連載　外国滞在の思い出（5）ケルンからユトレヒトへ　篠原眞
連載　昔噺子音楽談義（浮世絵と音楽　絵がたり義太）第11回「幕末リサイタル前後について」
連載　浅岡弘和／阿方俊／小西徹郎
コンサート・レポート　宮本英世／板倉重雄
栗原麻樹ピアノリサイタル／深沢亮子ピアノリサイタル
第十二回山木千賀リサイタル
ELオーケストラによるコンチェルトとアリアのタベ
吉江忠男バリトンリサイタル2020
深沢亮子と室内楽の仲間たち　～室内楽のタベ～ピアニストの集い～　クリスマスに集う音楽家達のコンサート
本会名誉会員・作曲家の金藤豊氏逝く　高橋雅光
お悔やみ
中島洋一作曲　谷川俊太郎の詩による歌曲集「ひきん」
楽譜出版

お問い合わせは　03-3369-7496
日本音楽舞踊会議

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6
寿美ビル305

1部800円　〒68円　年間〒共3200円
振替 00110－4－65140

なテキストを使用し、尊敬するドビュッシーの影響を受けた作品となっている。ドビュッシー没後の追悼の為に書かれた《管楽器のシンフォニー》では、追悼の荘厳な響きのコラールを含んだドビュッシーの思い出に捧げられている。又、ピカソは、バレエ《プルチネルラ》の衣装、舞台を担当し、キュビズム風なステージ、伝統的なマスクと18世紀スタイルの衣装を制作しており、ストラヴィンスキーは彼の色彩、造形術に満足し称賛している。

原始主義の作品の頂点ともなった《春の祭典》のシャンゼリゼ劇場での初演は、嘲笑、騒ぎとなり様々な悪評が残っている。自伝では、「ニジンスキーの振付に問題があったのが原因である。」と述べているが、大胆に伝統的作風を崩壊した彼の音楽の強烈なインパクトが聴衆に脅威のようなものを与えたに違いない。不規則に変化する刺激的な拍節、アクセント、不協和音、楽器の使い方、全てが画期的で今までにない音楽と言えよう。それ故に、各地でセンセーションを巻き起こすうちに20世紀の大傑作の一つと認知されるようになり、後世の作曲家、芸術家に多大な影響力を与える作品となった。

ストラヴィンスキーの墓

戦後は、パリでジャズに出会い黒人起源の民衆的な側面や新鮮さに魅了されて、11の楽器の為の《ラグタイム》を書き上げた。音色、その外観に惹かれ楽器を手に入れて自分で挑戦するほど熱中したハンガリーの楽器、ツィンバルムも《狐》に続いて使用している。《兵士の物語》、《ピアノ・ラグ・ミュージック》もラグタイムの影響で書かれている。

その後生まれたのが、ディアギレフの依頼によるペルゴレージによる作品の楽譜から管弦楽への編曲、引用によるバレエ《プルチネラ》である。18世紀のイタリアの旋律、音楽語法を彼流に再構築し、特徴的なストラヴィンスキーの色彩感を持った作品に仕上げた。その新しい音楽のあり方が注目を集めたのがきっかけとなり、ハイドン、ベートーヴェン、チャイコフスキーらを理念上のモデルに『新古典主義』、『古典主義への回帰』という新たな方針を掲げて作品の発表を続け、オペラ＝オラトリオ《エディプス王》、《詩篇交響曲》、《ヴァイオリン交響曲》、《ハ長の交響曲》、オペラ《レイクス・プログレス》などを生み出す。

その頃、不幸にも長女、妻、母を相次いで亡くし、57歳で戦時下のヨーロッパから作曲する上で安全性を求めてアメリカに移住する。渡米した頃は、引き続き新古典主義のスタイルの作品、《エボニー協奏曲》、《サーカス・ポルカ》などのジャズの影響を受けた作品を生み出した。ロサンジェルスのシェーンベルクの近所に引っ越したものの、12音技法には批判的でシェーンベルクとは敵対関係にあった。しかし、彼の死に衝撃を受けて、彼の音楽を再評価し69歳で音列作法を使用した作品を書き始め、バレエ《アゴン》、《レクイエム・カンティクルス》など、晩年の宗教的な主題による作品を多数残す。

「何を望んでいないかは、常にはっきりしている。捨てる術をわきまえることは、選択の優れた技法である。」と消去法の重要性をハーヴァード大学での詩学講座で語っているように、常に新しいものに目を向け取り入れながらも確固とした信念により根底は揺るがず、ストラヴィンスキーらしさを内包した作品を創造し続けた。